

パネルディスカッション—大学は復興にどのように貢献できるか—

パネラー：豊島正幸教授・吉野英岐教授

岩手県立大学復興 girls* (阿部夏美・野中里菜)

大船渡市こどもふっこう会議学生ファシリテーター (佐藤凌太・千田希)

時事通信社山形支局長・静岡大学防災総合センター客員教授 (中川和之氏)

コーディネーター：伊藤英之准教授

○司会 それでは、お待たせいたしました。ただいまよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。先ほど基調講演をいただきました中川先生にもパネリストとして加わっていただき、議論を進めたいと思います。

ここからの進行は、総合政策学部の伊藤英之がおこないます。

○伊藤 総合政策学部の伊藤と申します。私、こういうの非常に苦手です、司会とかすごく下手なんで、その辺はちょっと長い目で見ていただいて進めたいと思います。

それでは、まずパネラーの方に登壇していただきたいと思います。

最初に、先ほどお話しいただきました中川先生に座っていただきます。

その隣、豊島先生です。豊島先生は地形学とか、地圏システムの研究をされております。現在、県の復興計画の委員会とか、岩泉の災害復興計画の委員長ですとか、あと、いわて三陸ジオパークの学術専門委員会の委員長をされております。

次、吉野先生。吉野先生のご専門は地域社会学です。釜石市の復興まちづくり委員会のアドバイザーとか、あと、現地に非常に精通されていらっしゃいます。

あと、学生も少しここから参加していただきたいと思います。ピンク色のユニフォームを着た方、復興 girls*。阿部さんと野中さんです。

どういう活動をされているかってことをご存じない方もいらっしゃるかと思いますので、話は後ほど聞くことにして、簡単ないままでのマスコミに出た活動は、パンフレットの18ページのほうにまとめてあるので、ちょっとご覧いただきたい。

それとあと、大船渡市の復興計画、市民ワークショップと、それから、こどもふっこう会議で、学生が中心になってやった復興会議があるんですが、そのファシリテーターをやっていただいた、たくさんの学生に手伝っていただきましたが、そのなかの代表として総合政策学部2年生の千田さんと佐藤君、参加していただきます。

実は、この会場、16時45分に明け渡さないといけないんですよ。それで、相当タイトな話になってしまうので、きれいなパネルディスカッションになることはいまの段階でかなり厳しいという状況になっておりますので、その辺も含めて長い目で見ていただきたいかと思います。

実は私たち、3.11が起きて、復興に何らかの貢献をしないといけないってことを真剣に考えたんです。学内でいろんなディスカッションもしましたし、現地調査もやりま

した。そのときに、先ほど阿部先生がちょっと説明を最初のほうでされましたが、神戸から名取市にサポートに入っていた当時の生活を、復興も担当をされていた桜井さんって方にお会いしに行って、話を聞いたんです。そのときに、これは実は桜井さんからいただいたパワーポイントなんですけど、その市民が生活を再建するってことを実感するっていう場合は、7つのポイントがあるんだ。そういうことを教えていただきました。

1つは「住まい」「つながり」「まち」「心と体」「備え」「行政との関わり」「暮らし向き」。この中身は割愛しますけども、そのなかで重要なのは、復興、市民の立場からして生活の再建っていうのは、結果ではなくて過程が一番重要だってことを教えていただきました。それから、その復興に対して何が達成できたかっていうのは、ほとんど問題にならないっていうことも教えていただきました。復興、特に生活再建っていうことを考えたときに、ここに示す7つのことが非常に重要だってことを教えていただいたわけです。

1番、2番というのは、これは生活と都市整備です。都市整備の話。3番、4番というのは経済の話になります。

特に3番、4番を見ていくと、自立して立ち上がろうとしている人の気概をそがない。ここに書いてあるのは行政の立場からして何ができるかって話です。4番目、活発な経済活動を持続させる。

5番目は自分たちのつけを次世代に先送りしないということですね。6番、7番は、これは行政の話なんで、ちょっとここでは議論をするのは置いておくんですが、この1番から5番を見ると、私たちが復興に何らかで貢献するってことを考えるときに、非常にいいヒントになったなと思うわけです。

そこで、早速皆さんにおうかがいしたいなと思うんですけども、まず、吉野先生。かなりいろんなかたちで復興に吉野先生は関わってきていますけども、ちょっと具体的な、いままでやってこられた取り組みみたいなことをちょっとご紹介いただけないでしょうか。

○吉野 総合政策学部の吉野です。パンフレットにもあるように、公式にはというか、釜石市の復興計画のアドバイザーをやっております。アドバイザーというよりちょっと不思議な仕事をやっておりまして、何かかかりつけの往診医みたいな感じですね。普段現地におりませんけれども、結構頻繁に現地に行っていて、いわゆる会議で話をする立場でもなく、何かこう大きなビジョンを出す立場でもないんですけども、さまざまな会議の会と合間に現地でいま課題になっていること等々を出してもらってお話をしたり、あるいは、現地、実際の仮設住宅等々におうかがいして行っています。

だから、実は会議で出る話と、会議には出しづらい話が行政にはあるはずで、しかし、会議に出しづらい話というのは、やっぱりどっかで議論しなきゃいけない、けども、行政だけで議論するわけにもいかない。そのあたりをできるだけ研究者の立場で、比較的利益関係のない立場でお話を聞いたりしたりしていることが多いです。

もう一つは、田野畑村という所に行っておりまして、これはさっきジオパークで出たサップ船をやっている所ですけども、こちらも被災自体は人数は少ないんですけども、漁港を中心に被災の打撃度がすごく大きかったのも、そこもNPOの方々と一緒に、なかなか新聞には出せない、あるいは行政にも直接言いづらい話、そういったことを聞きながらやっている感じです。以上です。

○伊藤 はい、なかなか深いところの話にかかっている感じがします。

復興 girls*の皆さん、ぜひ難しい話でなしに、いままでどういう活動をされてこられたのかな、その辺ちょっとご紹介いただけないでしょうか。

○野中 復興 girls*のリーダーを務めさせていただいております野中です。復興 girls*は、今回の東日本大震災を受けまして、沿岸の企業さんを手助けをしようと思っ
て立ち上がったグループです。私たちは、沿岸企業の商品を、イベント等を主催しまし
て、販売しながら復興の手助けをおこなっております。

○伊藤 まさにここで書かれてるんですね、3番のところとか、4番のところ、ボトム
からサポートした、そんなような活動をされてきたということですか。

ちょっと方向性が変わって、一番端にいる学生二人なんですが、この二人は大船渡市
が、ちょうど今日、大船渡の復興局の方も来られているので、のちほどコメントでもい
ただければと思うんですが。まず、市民のワークショップと専門部会、延べ5回、さら
に、こどもふっこう会議みたいなイベントをやってきたわけですけども、なぜ大船渡市
の復興計画をサポートしようと思ったのか、その辺の動機からご紹介いただければあり
がたいです。

○千田 総合政策学部2年の千田と申します。私自身は陸前高田市の出身で、大船渡高
校に3年間通っていたということもありまして、震災も地元で過ごしていてちょっと、
それもあって、地元のために何かしたいと思ってずっと学校生活を送っていました。そ
こで、市民ワークショップのお手伝いをしませんかということで、先生のほうからお声
をかけていただきました。ぜひ、大学生ですので、そんなにやれることはないのですが、今
回、自分が少しでも役に立てればなという、そういう思いで今回お手伝いをさせてい
ただきました。

○佐藤 同じく総合政策学部2年生の佐藤凌太です。僕も出身地が陸前高田市で、高校
は高田高校なんですけど、陸前高田市は大船渡市と隣の市でして、大きく言ってふるさ
との復興に少しでも力になりたかったという思いがあって、市民ワークショップに参加
させていただきました。そして、次のこどもふっこう会議に関しては、僕自身が子ども
たちに自分たちの復興に何か力になっている、自分たちも何か復興に向けて取り組みが
できているという実感を持ってほしく、こどもふっこう会議をお手伝いさせていただきました。

○伊藤 参加してみてどうでしたか。何か感想とかあったら簡単に。

○千田 そうですね、私自身も被災者だったこともあって、それで、市民ワークショッ

プのほうでは、市民の皆さんの生の声を聞けたのもありましたし、そういう何ですかね、自分自身はそんなに役に立てなかったかなとは思ったんですけど、少しでもこういう活動をする事によって自分も何か自己満足じゃないですけど、すごくやれてよかったなっていう感想を一番に持つことが、私はできました。

○佐藤 市民ワークショップのほうでは、3番の立ち上がろうとする人の気概をそいではいけないとあるんですけど、特にそれに当てはまると感じたことがあって、市民の方々はとてもやる気があって、どうにか大船渡を復興させたいという気持ちが強く伝わってきたので、その気持ちをどうにかそがないように、うまくファシリテーターなどしていく難しさをひしひしと感じました。

子どもワークショップに関しては、市のほうで提案されていた復興計画に子どもたちが提案した復興計画がだいぶ近かったのにすごく驚いたのが印象的でした。

○伊藤 ありがとうございます。

さて、豊島先生、いま、市民の目から見ていますけども、今朝、一昨日の新聞を見ると、釜石市の湾口防波堤がまた現行に、災害前と同じように復興するみたいな記事が載っていたんです。ただ、地盤沈下は相変わらず続いていますし、いろんな問題が生じていると思うんです。それからあと、子どもたちのつけを、次世代に送らないっていうのは、これはまさにそうです。防災の話にもなりますし、何より都市基盤とか、これからどんどん復興していく面でそういう地形学、地理学的な観点でのサジェスチョンっていうのはなかなか重要だと思うんですが、何かコメントいただけたらありがたいです。

○豊島 専門としては地学の領域に入ります。それで、短い時間ですので、少し私に関わった岩泉のことについて、二、三、ご紹介したい、あるいは地学の立場からこういったことをもう一回見直していく必要があるんじゃないかという点を述べさせていただきます。

ご存じの方が多いと思いますけども、岩泉町の沿岸地域に小本という集落があります。そこは、小本川の河口部の近くに立地している所です。被災前は約160戸の集落をなしておりました。なぜこの位置に160戸がまとまっていまあるのか。その4分の3がこのたびの津波で流出いたしました。それをわかってそこに160戸集まって集落を営んでいたわけではないんでしょうと。

それで、私はその集落の立地過程というのを古い地図から集めていきまして、ある一つの見解にいたりしました。それは何かというと、小本集落というのは、海から見ればちよっと山影に当たる所、それを見たときに津波の被害を避けるためにそこに行ったかなと最初は思ったんです。でも、いろんな土地条件を見たときに、それが第1番目ではなかった。

何が1番目だったかということ、小本川の洪水、これからいかに逃れるかということで、その立地場所も氾濫から離れる山際に数十戸、大正時代にはあったと。それがあと、その土地条件としてはもう一つ、排水不良という土地があって、低平であってもそこには

居住はできないんです。したとしても1年に1回や2回、これは洪水の被害を受ける、排水不良を受ける。そういった経験。1年に1回、2回の経験ですと、人間はそれを知ってそれに合うように自然立地的土地利用をしていくんです。

ただ、そのあと、その小本地区の拠点性、有利性などがあって、どんどん増えていって160戸までなった。その過程においては45号線の開通、あるいは小本トンネル、宮古との利便性というような経済的な状況を踏まえてだんだん膨れ上がって、そして、安全性を確保するために河川堤防をつくって行って、さらには平成に入って防潮堤もという、そういう成り立ちであった。

そういう成り立ちを踏まえると、土地の条件をもう一回見直して、これから先、先ほどありましたが、次の世代につけを残さないためには、なりわいも含めてどういう住まい方をすればいいのかなという、もう一回考える機会になったのではないかと。

そこにおいては、われわれ地学者はどんどんとわかったことをわかりやすいかたちで提供していく、そういったことをあらためて大事だなと、われわれももっともって知っていかないといけないなと思った次第です。長くなりましてすみません。

○伊藤 先ほど会場のほうで、そういうドキュメントを残していくことは非常に大事だと、重要だというコメントをいただきました。いまの豊島先生の話ってまさにそういう土地利用条件とか、その土地のなりわいっていいですか、そういうコメントだったと思うんですけども、なかなかジオパークには近いような話になってくるんじゃないかと思うんですが、中川さん、何かコメントをいただけますか。

○中川 はい、ありがとうございます。岩手の場合はいろんなかたちで残しておいていただいたものがたくさんあったので、今回、釜石だけじゃなく多くの地で多くの方が実は亡くなっていますけど、かなりの方が助かったっていうのは、人口が増えているなかでいうと、やっぱりきちんと何かを伝えていったんだろうと思っています。

たぶん宮城野側で、そういう意味ではあまり土地のことを考えず、伊達政宗があそこに国道を引いたのもあまり意識せずに、便利な所、平らな所だからといって鉄道を引いてしまったことが、たくさん集落がそこに持って行ってしまったことにもなっているというのも、教訓的だろうと思うのです。何ていうのですか、慰霊碑だけではやはり伝えられないものがあって、どうやってその土地の成り立ちみたいなものをわかりやすく残していくか。皆さんにイメージしてもらうか。その土地そのものがどういうなりわいを成すのかという話をどうやって伝えていくか。

たぶんそれは何かものを残していくことだけではだめで、やはり誰かが説明していただけるような、特にジオパークっていうのはガイドさんがとても大事だといわれていますので、先ほどちょっと紹介しましたが、サップ船の船長みたいな方とか、いろんな方が語っていただくことによって、語り継いでつなげていく。

ただ単に、それも被災だけでなく、そこからの復興、それから、土地そのものとか、そのまたよいところみたいなこともうまく伝えていただける。船長たちが本当に自慢気

に海岸のことを話したのがとても印象的なのですが、こんなようなかたちでぜひやっていただけると、聞いたほうもなるほどというふうな感じで、より何ですか、自分たちの考え、備えにもなっていくのかなと思ったりもします。

○伊藤 サップ船って言葉が出てきたので、ちょっと吉野先生、何か考えございますか。いまのコメントについて。

○吉野 サップ船、ご存じのように小舟です。小さな小舟で、船外機を付けて動かすものなんですけど、あれをまさか観光に使うとは思っていなかったっていうのが最初の現地の方々の考えで、しかし、あれは漁に使うもんであって、人さまを乗せるもんじゃない。だけど、そこは、わりと割り切ってサップ船というものが、人を乗せても非常に面白いもんだっていうことと、それから、やっぱりさっき出た北山崎っていう断崖絶壁を下から見るとっていうのは、あんまりそれまでなかったんです。

だから、震災前の話ですけども、震災前で非常にあそこの価値を評価していただいて、何とかこれを岩手の一つ目の目玉にもう一回しようというところで震災が起きました。サップ船も流されて、2そうは助かっていますけれども、流されてしまったので、本当に非常に上がったところですよとなくなってしまったっていうそのプロセスです。そんなことを考えないところで起こったんだしたらまた話は違うんですけども、そういうことを考えている途中で、しかも実行したところで起こった災害というものに対して、やっぱり私たちが、どういうふうなそれをもう一回復活させるっていうか、復活をお手伝いできるのかっていうのは、やっぱり状況をちゃんと理解してからアプローチしないと、現地としての気持ちをくむのが難しいんじゃないかなと思っています。

○伊藤 ありがとうございます。だんだん話を広げていくと、たぶん45分で終わりにくいと思うんですが、せっかくですので、ちょっと会場のほうから、先ほどのパネルディスカッションにかかわらず質問も幾つかあったと思うんですが、何かご意見とか聞いてみたいなってことがあれば、コメントとかいただきたいなと思うんですが、どなたかコメントいただけるような、いませんか。

○豊島 はい。

○伊藤 あ、申し訳ない。

○豊島 このたび三陸沿岸、そこに多くの方が目を向けました。それで、そのなかには先ほど中川先生のお話にもあったように、プラスの意味付けして、価値のあるものにしていって発信していくということがありました。

そこで、学生さんたちにちょっと質問があります。皆さん、本当にその活動を通して三陸沿岸に何度も足を運んだと思いますけども、三陸沿岸を見たもので、「えっ、こんなものあったのか」とか、あるいは「すごいね」とか、それは人でもいいし、風景でもいいし、ものでもいいし、何かそこで「えっ」と感じた、学生の感性で「あ、すごいね」と見えたものがあったら教えてもらいたいんです。

私は私で、例えば先ほどお話のあった田野畑村の断崖絶壁、あれはあれでその説明は

要らないんです。素晴らしい。けども、地学を専攻した者として、そこにまた面白い意味付けをこれからやっていかないと考えております。そのためにも少し離れるけど、地質学のほうも勉強しなきゃなと考えている。そんな思いがしております。どうぞ、学生さん、お願いします。

○阿部 実際に被災地だとかに行ってみて、私たちが直接かかわってきたのは、被害を受けた企業さんだとかを訪問してきたんですけども、実際にやっぱり被災地域に住んでいるってということで、企業さんとかも被害に遭われて大変だったと思うんですけども、私たちと直接会うってことも了承していただいたりとか、私たちの活動について温かい目で見守ってくださったりだとか、そういう人とのつながりの面ですごく、沿岸の方々の優しさだとかを知って、ちょっとそういう人の温かさがすごいなと感じました。

○伊藤 大船渡地区はどうですか。

○佐藤 先日、大船渡のほうでジオフェスティバルというイベントがありまして、それのお手伝いに行ったときに越喜来という地域の民宿に泊まりまして、次の日の朝、海を見たんですけど、私は沿岸出身、それこそ陸前高田なんで、海はいままでもずっと見ているんですけど、震災を経てあらためて朝のきれいな海を見てみると、もう地元の海はここまできれいな海だったのかとあらためて認識させられたというか、あらためて感動したのがすごく印象的でした。

○伊藤 せっかくなんで千田さん、何かありますか。

○千田 そうですね、私も先日そのジオフェスティバルのお手伝いで行ったときに、夜、すごい星がきれいで、絶対、盛岡・滝沢ではこんなに星が絶対に見えないと思って。そういう自然、海とか山とか、そういう環境面がやっぱり私は三陸の一番大事にすべきところかと、あらためてやはり感じたこともありまして、これからジオパークがそういう自然だったりとか、今回の被害だったりとかの保存にどんどんつながっていけばなと思いました。

○伊藤 中川さん、ちょっと何かコメントを。

○中川 いやいや、それはもうありがたいなと思って聞いていたんですけども。私が暮らしてきた神戸のふもとの六甲山というものは、ある意味ですぐ目の前にあるってことは、こいつが高くなったのは、こんだけここに地震がやってきたからだっていう意味では、怖い嫌な山かもしれません。でも、やっぱりいい所なので、ちゃんと先ほど有珠山のとときに、子どもが有珠山を愛して備えるって言うていましたけど、そんなようなことをやっていかなければ、これまでの方策はどちらかというと軽視して遠ざけることばかりやって、遠ざけてきたんですけど、そうでなくてちゃんと認識していく。しかも、いいところもちゃんと見ていきながらというようなことなのかなと思います。

例えば変な話ですが、夫婦でもお互いけんかをして認め合うみたいなものも含めて、何かそういう愛し方っていうのもあるのかなと思っています。いま、すごく学生さんた

ちはそこに気がついていろいろな、すごくうれしいなと思いますし、ぜひ頑張っていた
だきたいなと思っています。よろしくお願いします。

○伊藤 そういうことです。豊島先生。

私の専門はどちらかという火山とかのほうなんです、火山だと、火山の恵みって
いうことをダイレクトに伝えやすいんですが、いくら何でも地震の恵みとか、津波の恵
みっていうのはとても考えにくいんです。ただ、私たちそういう地球と共生して、自然
災害をコントロールすることができないので、何とか地球の営みと共存していかないと
いけない。そういう事情があるわけです。

45分で、5分延長がよいということなんで、ちょっと視点を変えて、もうちょっと
議論を進めていきたいと思います。

ここに書いてある、立ち上がろうとする人の気概をそがないって意味では、復興
girls*の活動って非常に効果的であったと思うんですね。実際にどうでした。そういう
企業の方とお付き合いしてみて、そういう何か感触とかってありましたか。どういう印
象を持たれましたか。印象的なことがあれば教えてください。

○野中 私たちは、この企画が初めてやることだったので、何からやればいいのかまず
わからない状態で、一応企画書というものをつくりながら、沿岸地域の企業さんを訪問
したんです。やはり被災に遭われてからだったので、すごい大変な状況だったんですけ
ども、私たちがやりたいということで話を聞いてくれたのは、すごい温かいなと感じま
した。やはり私たちは最初企画書に自分たちの意見しか書かないで持っていったんです
けども、その視点から沿岸企業さん側は「同意点書かれていないやろう」と指摘を受け
たときは、やはり学生と社会というものはすごいちょっと厳しさが違うのかなというの
を痛感させられました。

○伊藤 なかなか私たち経験できなかったことがいろいろあって、どうしようか、すみ
ません、では、一個、立ち上がろうとするその気概をそがないって意味でおうかがいし
たかったのは、吉野先生、インターネットでちょっと検索したら、「大津波にも負けず
頑張る母ちゃん！ 応援ツアー」っていうのを何かやられていたみたいなんです、そ
の話をちょっとコメントいただけますか。

○吉野 大学の仕事じゃないんですけども、行ったのは大槌と陸前高田です。大槌はご
存じのとおり被害が大きかったんです。仮設のかたちで食堂を開きたいってお母さんた
ちがイまして、吉里吉里なんですけども、周りにはもう見渡す限り何もなくなってい
たんですけども、何かしたいっていうのは、現地の方々だってものすごい強くて、こ
のままじっとしているっていうのはどうも性に合わない。

何かしたいんだけど、何をしようかってときに、たくさんの方々の支援の方々が夏だ
つたんで現地に来ていました。ところが、食べる所もなければ休憩する所もないんです。
最初やっぱりそういう支援をされる側だったんですけども、支援がいっぱい来るなか
で、これはやっぱり自分たちでできる範囲でってことで、焼きそばとか、おにぎりとか、

ラーメンとか、スーパーハウスっていう3坪の移動ができるプレハブのようなものでお母さんたちが始めたのが大槌です。

値段が300円ぐらいで「いくら何でも安過ぎるから、それはもうちょっと上げたほうがいい」ってみんなから言われるんですけど「上げられない」と言うんです。「いや、でも、絶対それじゃあ安過ぎる」と言ったんですけど「いや、材料を供給してくれるところも実は割り引いてくれている。自分たちはそういった割り引きされた材料を仕入れてやっているから、自分たちの利益をなかなか取りづらい」。その気持ちが非常に強くなって、やっぱり世話になっている分だけ逆に自分たちが何か世話ができないかって気持ちで店舗を始めたのが大槌でした。

陸前高田は広田半島で、入り口は水没してしまって孤立した広田半島の所でおやきというものをつくっているお母さんたちのグループの所にも、ツアーをつくって皆さんを連れて行きました。私はおやきっていうのは長野県だと思ったら、実は広田半島にもおやきってあるんです。

○学生 おやきって何ですか。

○吉野 何か焼いて食べるんです。なかが海鮮おやきって行って、野沢菜じゃなくてホタテが入っていたんですけども、おまんじゅうみたいなもんです。あそこは何かはしご登ってトラマエするところなんだけども、そこがやっぱり全部流されてしまっていて、でも、お母さんたちって、やっぱりこういうときはできることがあるんだからやりたい。つまり、おやきをつくる技術は持っているけど、ないのが工場と材料。そこさえ来てくれれば、自分たちいくらでもできるっていう意味で、支援っていうのは別に、技術支援は何も要らないので、ものを流れる支援をしてもらいたいっていう意味で現地へ行ってきました。

その意味では、陸前高田も大槌もものすごい被害を受けて、たくさんの支援を入れているんだけど、それだけじゃない動きがいま現地であるっていうこともご紹介したいなと思いました。

○伊藤 いまの話を聞いていてふっと思い出したのは、先ほど中川さんのパワーポイントのなかで、若い人たち、中越でしたっけ、若い人が現地へ行ってくれて、おいしい、おいしいって現地のもの食べることが、地域が元気になるっていうようなコメントを思い出したんですけども、その点、中川さん、何かあります。

○中川 そうですね。中越の場合はだいぶ時間が、特に冬を過ごしたときにそういうことがあって、それから変わっていったというように聞いているんですけども、今回でも、やはり私自身も三陸のほうを回ったときにおいしいものをいただくことが、すごく私も元気になるし、やはり出してもらうことで元気になります。やっぱり支援されているだけだと、絶対人はしんどいですし、どんなことでもやっぱり自分ができることがあってなんぼであると思うんです。

先ほどの立ち上がろうとする人の気概っていうところ、どんなことでもいいけど、自

分で動き出すことがとても大事です。

かつて奥尻の地震のときに青苗地区の方々が支援づけになってしまって、結局いろいろな制度がサポート入ってきて、島のなかであそこの人たちのそういう支援に対する依存を地震病というような言い方をされたそうなんです。やはり神戸のときにそういうことはしてはいけないという議論もありながら、少しずつそういういままで地元の人たちが動いていたところを、どうやってまた仕組み化するかって、これも難しいんですが、でも、そういうものは少しは制度もできてきたと思いますし、皆さんもできるだけそういうかたちでこの3番をすごく大事にしていただければと思っています。

なかなか仮設だとか、そういうところばかり目がいくんですけども、そうでなくて自分たちで頑張っている人たちをうまく見つけてあげて応援する。だから、いまのおばちゃんたちもそうだと思いますけど、そういうところの方の元気を、また、よその人からもらうんじゃないなくて地元のなかからもらうと、地元のちょっとしんどい人たちも、自分たちもって気持ちになっていくと思うので、それがとても大事なのだなと思っています。

○伊藤 会場から何かコメントとか意見とかありましたら。じゃあ、小井田先生。

○小井田 総合政策学部の小井田です。

私は今日のたしか後ろから2番目だったと思うんですが、商工会の研究に関わってまして、私自身は経済理論のリスクなどの分析というのが専門分野なんです。そのなかで一つお聞きしたいことがございます。

中川先生にお聞きしたいんですが、ジオパークに関して、究極の防災対策だというようなお話があったと思うんですが、地元のことをよく知ることによって、もちろんプラスの部分もわかるんだけど、マイナスの部分に、リスクについて正しく理解できるんだということでしたけれども、それは通常の場合に例えばいろいろな防災教育ですとか、そういったこともやっていると思うんですが、ジオパークだと特にリスクについて正しく理解できるというような理由がありましたら教えてください。

○中川 ありがとうございます。もちろん防災教育を丁寧に徹底的にやっていくとある意味で重なってくるところがあると思うんです。いまのジオパークのというか、そのリスクを考えていくうえで大事なことっていうのは、わからないことがあるってことだと思うんですよね。なかなか一般の学校の教育だとか何かだと、わかったところっていう話でしか教えていけないんですけども、そこはジオパークっていうのは学会がかかわっているだけ、わからないことはわからないって突き放すんじゃないで、どうしてわからないか、どこまでわかっているのか、それから、わかっていないことによってリスクがどういうふうに振れるのかみたいな話を、そういう専門家を引っ張ってきて一緒に学ぶことができるというふうに私は思っています。もちろんすべてのジオパークでそんな活動までできているとは思ってはいないんですけども、そこに持っていけると思います。

私は学会のなかでどちらかというと異分子側にいますけど、そういう専門家たち、す

みません、いま目の前の皆さん、学生を見て大変失礼なんです、そういう方々を社会に引っ張ってくる、子どもたちの前に引っ張ってくる。それで、実際にわからないことをちゃんと子どもたちも納得する、社会の方々も納得するようなかたちで伝えていく。研究するだけでなくそういうことに関わっていただけるんじゃないかと思っています。

だから、日本のジオパークの場合、たまたま学会が中心で動かしていますので、それをととてもできる可能性は私はあると思っています、そういうところがモデルができていて、さまざまな防災教育のなかに入っていけばいいと思っています。そこにいまの日本の防災教育ってどうしても避難教育だとか、そういうところにしかとどまっていないので、そういうところに発展していく可能性はととてもあると思っています。ぜひご協力いただければと思います。よろしくお願いします。

○伊藤 すみません、ファシリテーターの運用がやはり下手でして、もう時間が超過してしまっておりますので、これから意見、質問とかある方はアンケート用紙が付いていますので、その後ろへ質問と、もし返事がほしい場合は住所とか書いていただければ、担当の先生にお渡しいたしますので、そういうかたちでちょっと対応させていただきたいと思っています。すみません。

これでちょっと中途半端ですが、パネルディスカッションを終了させていただきたいと思っています。

○司会 ありがとうございます。皆さま、もう一度大きな拍手をお願いいたします。

以上をもちまして、本日のプログラムはすべて終了となります。長時間にわたりお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。

なお、受付にてお配りいたしました資料のなかにアンケートが入っております。ご記入のうえ、受付スタッフにお渡しくださいますようご協力お願いいたします。

本日はありがとうございました。どなたさまもお気をつけてお帰りください。

(終了)